

盲導犬と歩く

Walking with Guide Dogs
50th Anniversary of
Japan Guide Dog Association

日本盲導犬協会50周年記念誌

さらなる飛躍を胸に 次の50年に向かって新たな一步をふみ出します

1967年8月10日、当時の厚生省の認可を受け、日本で最初の盲導犬育成団体として設立した日本盲導犬協会は、このたび50周年を迎えました。日頃からご支援いただいている皆様には心より感謝するとともに、50周年という記念すべき時を、一緒に迎えられることを大変うれしく思います。

創立50周年を記念し、当協会のこれまでの歩みと、これからの展望について皆様に広く知っていただきたいという思いから、『盲導犬と歩く 日本盲導犬協会50周年記念誌』を刊行いたしました。本誌には盲導犬育成事業の全体像や取り巻く現状、課題なども盛り込んでおりますので、盲導犬をさらに深く理解していただくための資料としてもお役立ていただければ幸いです。

「10年、偉大なり。20年、畏るべし。30年にして、歴史成る。50年、神の知し。」という中国の格言があります。これは、一つのことを長く続けることの大切さを説いた言葉ですが、半世紀にわたって当協会が存続し、先人たちが築き上げたものが今へと引き継がれ、皆様のご協力と職員たちの努力によって盲導犬育成事業を続けてこられたことには、大変大きな意義があります。

けれども、視覚障害者の方々に寄り添い、自立と社会参加を促進するために、安全で快適な盲導犬との歩行を提供するという協会の使命にゴールはありません。私たちはこの50年という大きな節目に、慢心することなく原点に立ち返り、次の50年へ向かってさらなる一步をふみ出します。皆様には変わらぬご支援・ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。



公益財団法人 日本盲導犬協会
理事長 井上幸彦

Yukihiko Inoue

井上幸彦

理事長（8代目）



質の高い盲導犬を
安定的に育成できる体制を確立すること、
これこそが協会の、そして私の使命です。

盲導犬不足の現状を なんとか打開したい

盲導犬を待っている人が3,000人もいるのに、日本の盲導犬の数は1,000頭にも満たず、圧倒的に不足している――。

2003年9月、縁あって日本盲導犬協会8代目理事長に就任することになったとき、盲導犬に関する深い知識がまだなかった私は、この現実を初めて知ってとても驚き、と同時に、盲導犬育成事業が多くの方々の無償の愛に支えられていることも知り、ご支援くださる方々の温かさに感動を覚えま

した。

私は長い間、警察組織に身を置き、最後は警視總監として退官しましたが、その間、国民の生命、身体、財産を守るという立場で仕事をしてきました。そんな私が視覚障害者の社会参加の促進と盲導犬の育成普及を目指す協会の運営に携わることになり、光栄に思うとともに、その責任の重さを強く感じました。

盲導犬を希望する目の見えない人、見えにくい人に、盲導犬をできるだけ速やかに提供する体制を確立するためにはどうしたらよいか。

良質な盲導犬を安定的に育成し、少しでも多く

盲導犬ユーザーの人生に ひたむきに寄り添い、 安全で快適な歩行ができる 盲導犬を提供することが原点。

の視覚障害者の方々の希望に応えること。これこそが協会の課題であり、私の使命であると強く感じ、盲導犬育成体制を改革する決意を固めました。

そこから協会職員が一丸となり、「盲導犬新時代」を目指して動き始めました。

大きな3つの柱を立てて突き進む

目標に掲げたのは、良質な盲導犬を「年間50頭」育成すること。これが実現できれば、日本盲導犬協会の存在が確固たるものになると確信しました。とはいえ、当協会の2003年度の年間育成頭数は21頭でしたから、一気に2.5倍にするのは容易なことではありません。そして、ただ「数」が増えればいいということではなく、「良質」であることも重要です。そのためには、事業には不可欠な「ヒト・モノ・カネ」の三拍子を「50頭体制」に耐えうるものに整えなければなりません。

まずはヒト。優秀な盲導犬訓練士なくして、良質な盲導犬育成はできません。盲導犬を年間50頭育てるためには盲導犬訓練士が10人、盲導犬歩行指導員も最低10人は必要ですから、盲導犬訓練士の育成が急務だと考えました。

次にモノ。実際には「物」ではありませんが、この「モノ」にあたるのが、盲導犬候補犬の確保です。盲導犬候補犬の中から最終的に盲導犬になれる成功率は3～4割と言われていましたから、50頭育成するためには170頭くらいの子犬が必要となり、それだけのパピーウォーカーも必要です。そして、50頭体制を維持していけば、毎年50頭の引退犬が生まれることになるので、ハッピーリタイアできるシステムづくりも欠かせません。

そして、「ヒト」と「モノ」を支えるのが「カネ」です。当協会の収入の9割以上は皆様からの寄付に支えられていますので、盲導犬への正しい理解を啓発し、さらに支援の輪を広げるための広報活動も重要となってきます。

この三拍子をそろえるための具体策として、1. 盲導犬訓練士学校の設定、2. 繁殖センター機能も

有する訓練施設の開設、3. 安定的な財政基盤の確立を大きな3本柱とし、2004年からの5か年計画として突き進みました。

不思議な縁に導かれ、 革新的な命題に挑む

計画実現の第一歩として、2004年4月、神奈川訓練センター内に盲導犬訓練士学校を開校。盲導犬訓練士の世界はこれまで、先輩に教え鍛えられていく徒弟制度でしたから、盲導犬訓練士を養成する学校の設定は、日本初の試みでした。

開校当初から、視覚障害者のために盲導犬を育成したいという意欲に燃える応募者が全国からたくさん集まりました。初年度に応募者はなんと約200人で、そこから10人に絞りました。そして、毎年、^{新しい}蒔いた種が芽を出し、力強く葉を広げていくように、高い志をもったプロフェッショナルが幾人も誕生しました。訓練士学校は、開校から11年たった2015年3月をもって一時休校の形をとっていますが、大きく成長した彼らは盲導犬育成事業に新しい風を吹きこんでくれたと、確かな手応えを感じています。



さらに、2006年10月には、繁殖・研究、盲導犬訓練・共同訓練、引退犬のケアから盲導犬の啓発まで、盲導犬の一生に責任をもち、遺伝的な研究も進めながら良質な盲導犬を育成できる複合施設、「盲導犬の里 富士ハーネス」がオープンしました。

繁殖犬が安心して出産できる環境も整い、ここから毎年、盲導犬候補犬となるたくさんの新しい命が誕生しています。

実は、富士山麓にあるこの地と私には浅からぬ縁があります。ここは私がかつて警視總監として闘ったオウム真理教の富士山総本部の施設跡地だったのです。すっかり負のイメージを背負わされてしまったこの場所を、盲導犬育成という希望の光を与える土地に生まれ変わらせる仕事にかかわれたことは、私にとって無上の喜びであり、深い感慨を覚えました。

「盲導犬の里 富士ハーネス」の開設で、日本盲導犬協会の訓練施設は「神奈川訓練センター」「仙台訓練センター」と合わせて3か所となりましたが、2008年にさらにもう1つ、「島根あさひ訓練センター（パピネス）」も開設されました。

ここは「島根あさひ社会復帰促進センター」（刑務所）の附帯施設としてつくられた画期的なセンターで、法務省のPFI事業（Private Finance Initiative＝国や自治体が公共サービスを行う際に民間の資金や知恵を借りて行う事業）に協力し、受刑者が盲導犬候補犬を育てることで社会復帰の促進を図る日本初の試み、「島根あさひ盲導犬パイププロジェクト」を行っています。元警視總監の私が受刑者の社会復帰を支援する活動にかかわれることにも、深いご縁を感じます。

「島根あさひ訓練センター」は、中国・四国エリアで初めての盲導犬育成施設でもあり、地域の視覚障害福祉向上のために、大いにお役に立ちたいと思っています。

「いい盲導犬に出会えた」。 その言葉が何よりの喜び

2004年度からの5か年計画として進めてきた、盲導犬年間50頭育成のための体制づくり。私たちはさまざまな壁にぶつかりながら進み続け、2008年度にはついに目標の50頭を達成しました。非常に感慨深い出来事でしたが、頭数達成は一つの通過点で、地固めにすぎません。そして、50頭を維持することがいかに大変かも身をもって経験しました。2011年には東日本大震災という未曾有の大災害が日本を襲い、東北地方在住の盲導犬ユーザーが被災され、仙台訓練センターの業務も全面停止するという、大変つらく厳しい状況に置かれました。

こうした想定外の事態に遭遇し、一時は育成頭数も減少を余儀なくされましたが、2013年度以降は40頭で推移、2016年には新たに掲げた45頭育成の目標を無事達成し、46頭の盲導犬を提供することができました。

どんなときでも置き去りにしてはならないのが、「良質な盲導犬」を貸与して、視覚障害者の方々の社会参加を促進するという盲導犬育成事業の本質です。盲導犬ユーザーの希望に可能な形で応え、その人の人生にひたむきに寄り添い、安全で快適な歩行ができる盲導犬を提供することが協会の原点であり、目の不自由な方々が盲導犬との歩みを希望される限り、盲導犬育成は脈々と続いています。

私は盲導犬育成の実態を知り、多くの人々に盲導犬についてもっと知っていただきたいという一念で、理事長の大役をお引き受けしました。そうした中で、盲導犬ユーザーやボランティアの方々とさまざまな出会いがあり、私の世界も広がりました。私自身は犬を飼ったことはなかったのですが、犬の持つ癒やしの力も知りましたし、犬を育て

信頼される
「徳のある協会」を目指して、
「凡事徹底」を合言葉に、
一丸となって邁進する。



「数」だけでなく、
「質」の向上も目指して
一歩一歩着実に
前に進む。

るには愛情を持って、叱らないでほめてしつけることにもとても共感しました。盲導犬ユーザーの方から「盲導犬と暮らし、初めて日々が明るい気持ちでいられるようになった」「風を切って歩けるようになった」などの声を聞くたびにとてもうれしく、理事長としてやりがいを感じます。目の不自由な方に「いい盲導犬と出会えた」と言っていたいで初めて、社会に認められる協会になれると考えています。

盲導犬「待機者ゼロ」への道を切り開く

「盲導犬新時代」に向けての改革は、もちろん私一人の力ではなく、同じ志をもつ役職員が一丸となって進めてきたものです。事業について活発な議論ができるよう月例の常任理事会を開催し、それぞれが状況報告をしながら第三者的な目で率直な意見を交わし合います。出席者一人ひとりに気づきがあることで組織が活性化していく。これが私の流儀で、この常任理事会が協会活性化のための一つの支えになっているという気がしています。

そして、私たち協会職員は使命達成のために、「凡事徹底」を合言葉に日々取り組んでいます。当たり前のことを一人ひとりが徹底的に行うこと、これを心して今日精いっぱいあらん限りの力でや

り抜くことこそ、目標達成への道が開けると確信いたしております。

* *

1967年に設立された日本盲導犬協会は、今年で50年を迎えました。この50年間、盲導犬育成事業を続けてこられたことは、皆様の多大なるご支援があってこそと、本当に感謝しています。私は2003年よりこれまで先人たちが営々と築き上げてきた事業を受け継いできましたが、この記念すべき年を皆様と一緒に迎えることができ、喜びもひとしおです。皆様からのお力やお声が私たちのエネルギーの源です。どうぞ今後とも変わらぬご指導ご協力、お願い申し上げます。

この50年間、そしてこれからも、目指すところは変わりなく、視覚障害者の社会参加と自立支援に資するために質の高い盲導犬を育成し提供することであり、これこそが協会の存在意義であると考えます。

日本の盲導犬不足の課題は一朝一夕には解決できない問題ですが、志は高く「盲導犬待機者ゼロ」を目標として、これからも一丸となって取り組んでいきます。職員一人ひとりが新鮮・清らかな気持ちを大切に、皆様に信頼いただける「徳のある協会」を目指し、日本盲導犬協会はさらに前進、進化していくために歩み続けます。

50周年記念誌刊行にあたって 理事長 井上幸彦	3
井上理事長からのご挨拶	4
質の高い盲導犬を安定的に育成できる体制を確立すること、 これこそが協会の、そして私の使命です。	
ビジュアルで振り返る50年	
2人6脚	10
1967年、日本で初めての盲導犬協会 ここに始まり、今に続く	12
良質な盲導犬を1頭でも多く、安定的に育成するために……	16
ユーザーと盲導犬はパートナー。ハーネスがつなぐ深い絆を全力でバックアップ	18
日本盲導犬協会の新しい歴史が刻まれた	20
盲導犬のいる生活をサポートするために わたしたちにできることを誠実に	22
もっと身近に盲導犬を知って、感じて、理解して	24
たくさんの皆さまの大きな愛に支えられて	26
50年で851頭(2017年7月末現在)	28
50年にあたって——Message	
副理事長 黒光 庸恭	31
常任理事 小田 和正 勅使川原直彦	32
多和田 悟 吉川 明	33
第1章 日本を代表する盲導犬協会へ —チャレンジの連続です	
第1節 盲導犬の歩み、世界と日本 日本盲導犬協会の使命(概論)	36
第2節 高い質の盲導犬を1頭でも多く(盲導犬育成編) —新たな視点で、訓練士・職員が一丸となって	42
第3節 協会の使命実現に欠かせない人材育成と人材活用(人材育成編)	62
第4節 視覚障害者から選ばれる育成団体へ(ユーザー編)	74
第5節 サポーターに支えられ50年 人と盲導犬が共に生きる社会めざす(サポーター編)	82
第2章 年表でみる 日本盲導犬協会50年のあゆみ	
	94

第3章 日本盲導犬協会^{いまむかし}—その原点を探る

第1節 日本盲導犬協会の創生期とその苦難の道程	118
第2節 3回にわたる中期計画作成は、当協会の変革と成長の証し	123
第3節 訓練施設の歴史と4つの訓練センターの現状	128
第4節 学校方式で盲導犬訓練士を養成	140
第5節 服従から教育へ、盲導犬訓練の変遷	146
第6節 盲導犬の認定と訓練士の資格認定	158
第7節 盲導犬パイププロジェクト	162
第8節 東日本大震災で、視覚障害者支援の中核となる	168

第4章 関係諸団体の紹介 —たくさんの協力を得て

ユーザー会	174
ボランティアの会	178
視覚障害者団体	
1 日本盲人社会福祉施設協議会	180
2 日本盲人会連合	182
3 全日本視覚障害者協議会	183
4 日本盲人福祉委員会	184
全国盲導犬施設連合会	186
国際盲導犬連盟	190
アジア・ガイドドッグス・ブリーディング・ネットワーク	194
盲導犬総合支援センター	196
日本身体障害者補助犬学会	198
視覚障害リハビリテーション協会	199
獣医系大学との連携	200
ACジャパン	202

資料データ	
全国盲導犬実働数 年度別推移／盲導犬頭数の推移	204
日本と諸外国の盲導犬数比較	206
指定団体認定のために提出した訓練計画(盲導犬3基準)	
盲導犬訓練計画	207
盲導犬歩行指導計画	208
盲導犬歩行指導員養成計画	209
盲導犬関連法	
警察庁	210
厚生労働省	211
環境省	216
内閣府	217
協会歌「瞳と命をつないで」	219
協会 使命／活動方針／職員の信条／運営方針	220
日本盲導犬協会 役員	221
職員	222

編集後記	223
------	-----